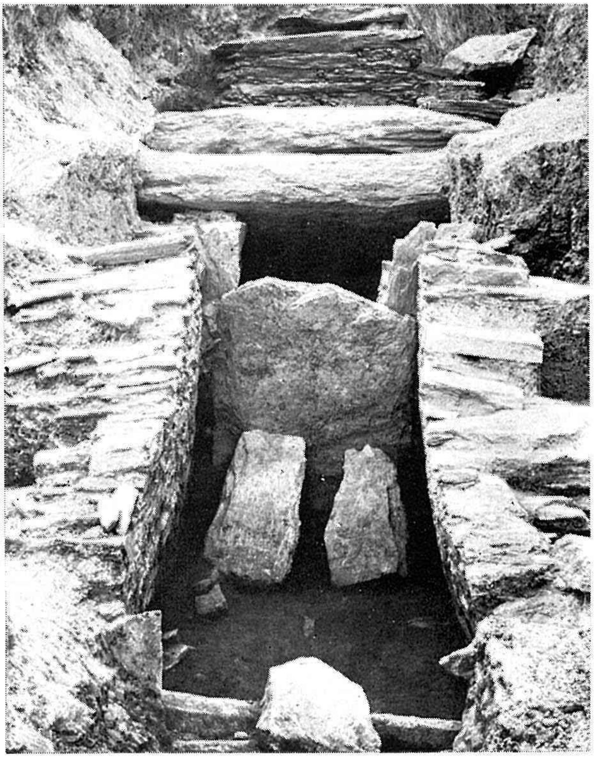
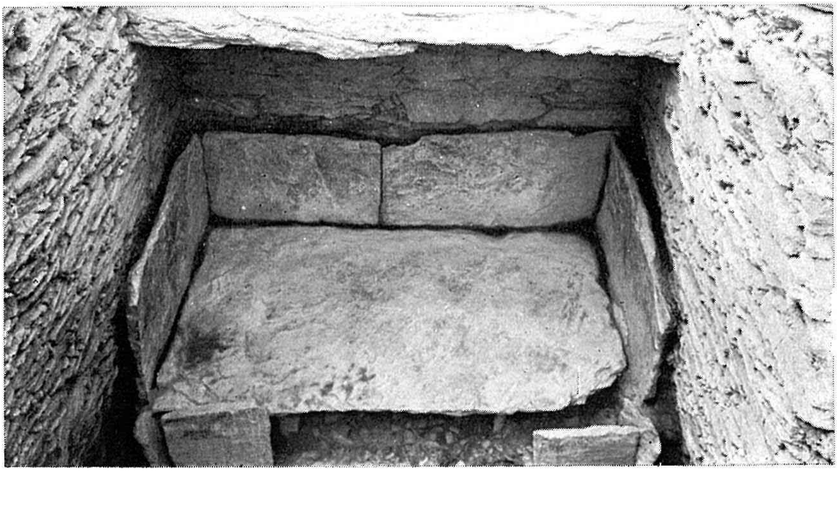
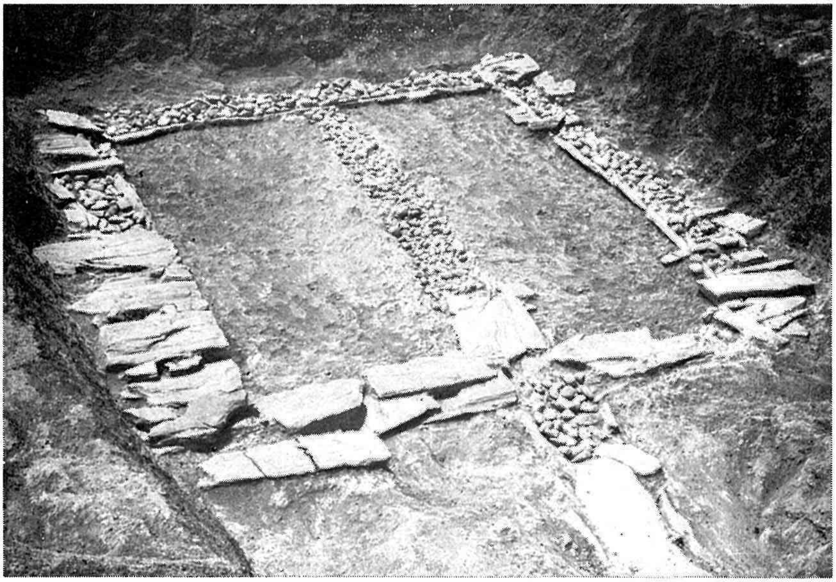
樋口・吉本　和歌山鳴滝団地古墳群発掘概報　付録図版

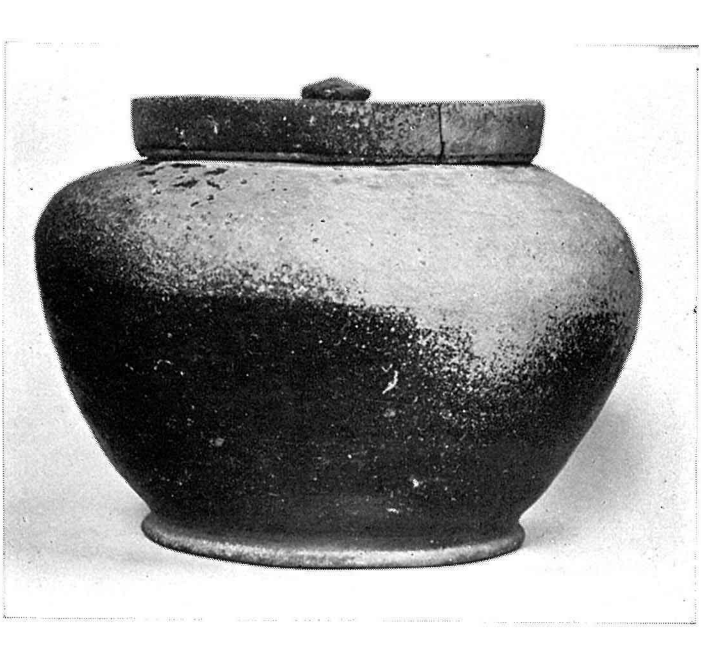


第一図（右）第一号墳　正面



第二図（下）第一号墳　石槨





第三図（上）第五号墳

第四図（下）第二号墳　蔵骨器（全高二〇・六㎝）

資料紹介

和歌山鳴滝団地古墳群発掘概報

樋口隆康
吉本堯俊

和歌山県開発公社によって、団地造成のために削平せられることになった和歌山市善明寺部落背後の通称泉福山一帯を、工事施行に先立って遺跡調査することになり、和歌山県教育委員会と同県文化財研究会からの依頼で、京都大学文学部考古学研究室が昭和四十年七月八日から八月三十一日まで発掘を実施した。

この地域は、紀ノ川北側、和泉山脈の南斜面の裾に接した一つの孤立した丘で、その東側は鳴滝川の小谷にのぞみ、南は紀ノ川の平野を展望する景勝の地である。この丘には従来古墳の存在は全く知られていなかったが、尾根二つこえた西方の丘には馬鎧甲を出土して著名となった大谷古墳があり、鳴滝川を遡った山脈の南斜面には、二、三の横穴式石室が開口しており、また東方二キロの六十谷は、家形須恵器の出土でしられている。したがって、この丘にも遺跡の埋没されている可能性があるので、この調査が実施されたのである。

まず、墳丘らしき盛り上りのあるところ十数箇所を選び、トレンチを入れたが、そのうち、五ケ所で古墳の所在をみとめ、そのうち三ケ所には遺構の一部をたしかめたので、調査の重点をこれらにおき、別記のごとき内容を明かにすることができた。

第一号墳

丘の東南端に位置している。墳丘はいたく削られ、しかもその中心部は大きく盗掘されているので、墳形を正しく復原することは出来なかったが、封土は縞状の層序をなす粘土質の土壌を堅くつき固めたもので、その粘土層内には赤色の土器砕片および須恵器片がまじっており、粘土層の一部は、地表面に露出していた。

内部の主体は、緑泥片岩で築かれた東南向きの横穴式石室である。天井石は、三石を残すのみで、他は取り去られていたが、いまの地表面から約一・四mの深位にその頂部があった。内部は玄室・通廊・羨道の三部からなり、その床下排水施設がよくのこっていた。玄室は長方形のプラン（長三・四m、幅・二・五m、高さ三・三m）で、周壁は、長手の板石の短かい小口を内側にして、整斉に積み、上方を次第に内方にせり出して天井の空間をせばめ、その上に長大石を横に架して覆ったものである。

床面上は、礫を厚さ10cmにしきつめている。

奥壁に接しては、石槨と石棚が設けてある。石槨は緑泥片岩の薄手の板石を両側一枚ずつ、奥に二枚立て並べて周壁とし、床は一枚石を二ヵ所の支石の上に平におき、一種の上床の形にしている。この石槨の床面の上方一・五mのところに、玄室の奥壁から張り出した一枚の石棚があり、あたかも石槨の上蓋のおもむきを呈している。

この石槨の前方の玄室床面にも小形の板石が四枚立ちならんでいて、別の遺骸を囲ったもののようであった。

通廊は、玄室と羨道を結ぶ狭い部分で、床には玄室の横幅一杯に長大石一枚をしき、その上の両側に小口平積の壁をきづいたもので、幅〇・九m、長さ一・一m、高さ一・五mあり、床は玄室の礫床面より二〇cmほど高くなっている。

羨道部は、通廊部と同じ高さであるが、幅を広くしており、長さ三・九五mある。その通廊に接するところには一枚の扉石をたててふさぎ、それから前方二・四mのところには床面に板石を横に渡して仕切りとしている。とくに、扉石には前から板石二枚をもたせかけた上、砕石と土砂をつめて入口の塞ぎとしている。

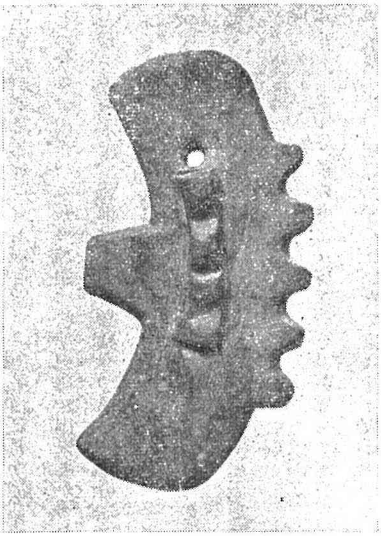
羨道の前端は石積みがくずれていたが、両側方に弧状に積んだ壁があり、入口の正面を整えていた。

床下に営まれた排水施設はよく原形をとどめていた。すなわち、玄室の礫床下の地上に、中軸線に沿って断面V字形の溝をほり、溝の両側に板石をならべて、内には礫をつめ、上を板石で蓋った構造で、それが、通廊の床石下から羨道の床下をとおって、石室外方にながくのび、全長約一四mに達していた。

埋葬の遺骨は、一片も検出されなかったが、玄室の奥の石槨上からは一対の金環がでて、ここに遺骸がおかれていたことは間違いないが、また石槨前方の礫床面には、木棺にうちつけた鉄の飾金具が四個、原位置のまま遺存し、またその附近には朱痕、木質痕もみとめられたので、少くとも、ここにも別の棺があったようである。

副葬品は大部分盗掘されていたが、礫床面に密着したものが取りのこされていた。それによると、鉄大刀二、単鳳式環頭大刀一、

金銅飾履一足、轡・鏡板一組、杏葉二、雲珠四、須恵器二、子持勾玉一、銀空玉一、などで、その大部分は玄室の前方部にかたまっていたが、子持勾玉（挿図）は石槨の床下のつめ土の中におかれていたのは注目されよう。



子　持　勾　玉（長さ10.4cm）

第二号墳

第二号墳は第一号墳の北方約二〇mの地点に存在する。

墳丘はそのほとんどを失っており、原状を詳にしないが、小型の円墳であったと考えられる。

玄室奥壁の背後約二mの所に八個の円筒埴輪が発見されたが、石室をめぐっておらず、また石室の床面から約一mの高さにあり、石室を被覆する盛土にかくれてしまうほど奥壁に接近しているので、この埴輪列は二号墳のものではなく、二号墳はこの埴輪列を有する古墳に重複して築造されたものと考えられる。

主体はほぼ東面する全長五・二mの横穴式石室であるが、周壁の下方一、二段を残すのみで、周壁の上半と天井石はすべて失われている。

玄室　長二・七m、幅（奥壁附近）二・一m

羨道　長二・五m、幅（袖石附近）〇・八m

石材はほとんど和泉砂岩であり、緑泥片岩は若干用いられているに過ぎない。袖石以外は比較的小さな粗雑な石材の平坦な面をそろえて壁面を構成している。現存する壁面の最高所は第一次葬床面より約一・一mある。

埋葬は数回にわたって行われたと考えられるので、順を追うて述べよう。

第一次葬　礫を敷きつめた床面の上に遺物が散乱していたが、注目すべき事は、杯・耳環・鉄鏃・刀子など比較的小型の遺物が玄室中央に遺存していたのに対し、台付長頸瓶・高杯・壷など比較的大型の遺物が六点、玄室東南隅に重なり合う様にかたまって出土した事である。これは第二次葬の際の追葬者の整理の結果を示すものと考えられるが、もしそうであれば、坏や耳環などは、第二次葬の時には、すでに堆積土の中に埋没していた事も予想出

来よう。

第二次葬　第一次葬の床面上に厚さ約一五cmほどの黄褐色粘土を敷き、その上に礫を敷いて床面を形成しているが、撹乱されていて、礫は第一次葬床面に比して著しく少い。遺物も原位置を示すと考えられるものは存在しない。すべて須恵器（杯・長頸瓶）である。

第三次葬（蔵骨器　第四図）　第二次葬床面より少し高い位置で出土したが、蓋部は羨道入口附近で、身部は玄室の隅で、共に裏返しの状態で出土、本来の埋置の状態を確認出来なかった。器はいわゆる薬壺形で、蓋部は下垂の縁壁をつけた被せ蓋式で、かるいふくらみの上面中心に扁平なつまみをつけており、径は一九・一cmある。身部は、高一八・五cm、最大腹径二八・一cm、口縁径一六・八cm、強く張り出した腹部に低い口縁と圏足とを添えたもので、腹部の左右の均斉はアンバランスになっている。軽い自然釉を生じ、胎土・焼成共に良好である。蓋部をかぶせて焼成が行われたらしく、身部の肩の上にその痕跡をとどめている。蓋をかぶせた全高は二〇・六cmである。

蔵骨器よりもさらに高く、第二次葬床面より約五〇cm上方、玄室のほぼ中央に土師質の破片がかなり密集して出土したが、その中に口径約二三・五cm、現存最大腹径二五・五cm、口縁と腹部とが断面において「く」の字形を呈して接し、その下約三cmの所に一条の突帯を有する赤褐色・土師質の土器の上半部の破片が出土した。蔵骨の容器として用いられたものであろうか。なお先端の大きく彎曲した鉄鎌の破片を伴出している。

石室の床下から検出された排水溝は、一次・二次の床面にそれぞれ連続する二回の築造を層位的に確認した。

第一次排水溝　第一次葬床面の礫層の下の地面に浅い溝を穿ち、その中に礫をつめたもので、玄室中央より出発して石室の長軸に沿って羨道の下をぬけ、石室の外方にまで続き約一一mの長さを有し、前後の高低差は約二mに達する。石室内では両側壁に平行しているが、羨道の端あたりからやや南に彎曲している。

第二次排水溝　第一次葬床面の礫層と玄門の仕切石を隔てて接し、第一次排水溝の上を、羨道部を南に次第に下降し、途中で第一次排水溝に合体している。第一次排水溝に比して大きな石を使用しているので、両者の接合部がはっきり確認された。全長約七m、高低差約一・五mである。

最後に、この第二号墳の注目すべき点を若干指摘しよう。

まず、円筒埴輪列を有する古墳に重複して、和泉砂岩を用いて築成されている点であろう。同じ地域にある第一号墳と第五号墳が緑泥片岩によって築造されているのと著しい相違を示している。

次は、一次および二次の埋葬がそれぞれ礫を敷いた床面およびその上に遺存していた遺物の年代差によって確認され、しかもそれが上下の層位関係を有する排水溝にそれぞれ連続していた事である。また、それは石室の規模に比すれば長大であり、礫のみよりなる点も第一号墳・第五号墳とことなる。

しかし、何よりもこの第二号墳の著しい特色は、横穴式石室に追葬された蔵骨器といわねばなるまい。正倉院にほぼ同型式の薬壺があり、この蔵骨器の年代が八世紀前半にある事を示している。須恵器の型式によって年代を考えると、第一次葬は七世紀中葉、第二次葬は七世紀末と考えられるから、蔵骨に用いられたかどうか不明の土師質の容器を考慮の外におくと、この第二号墳においては、約五〇年あるいはそれ以下の間隔をおいて、三回の葬礼の場を供した事になる。つまり、この第二号墳は、火葬に附されて蔵骨器に収められた第三被葬者が、土葬の第一・第二の被葬者と血縁的なつながりの存在した可能性、および、蔵骨器埋置の場としての横穴式石室の実例を示す資料を提供するものである。

第五号墳

第五号墳は今回調査された丘陵の西の尾根の突端に立地している。

封土はここでもそのほとんどが失われている上に、中心部には大きな盗掘坑が穿れていた。

主体部周辺の層位を見ると、黄色砂質土の地山の上に黒褐色硬質土を盛り、石室とそれに続く外部排水溝を構築しつつ、同時に黒褐色硬質土によって壁体の周囲をかためながら石室を包み、その上に黄色砂質土を覆うた構成の封土であったと思われる。

墳丘の裾は明らかでないが、上述の黒褐色硬質土の端のあたりから外部排水溝が彎曲しはじめるから、もしこのあたりが墳丘の端であるとすれば、石室の奥壁より一〇m弱のあたりであるから、墳丘は径二〇mに満たぬ規模のものであったと思われる。

現存の遺構は、石室の下底に営まれた排水施設と石室の壁体の最下段が一部残っている程度であった。

石室は、長二・二m、幅二m（内法）で正方形に近い。四壁は後述する方形排水溝の上に築かれたものであるが、最下段の石材が若干残っているに過ぎない。長約四〇cm・幅二〇〜三〇cm・厚約一〇cmの緑泥片岩の板石を小口積にしているが、東北辺のみは小口積ではあるがより長い側面を室内に向けている点が注目される。壁体はほとんど完全に失われているために、高さは全く不明である。

外部排水溝と接する石室東北辺に接して、当然その存在が予想された羨道部は、天井石はおろかその壁体を構成する石材も全く

認められなかった。その上、石室を包んでいる黒褐色硬質土は、壁体の築成と平行してその背後に積まれて行ったものであろうが、この東北辺においては、この黒褐色土が壁体の裏側に接して直立した面を形成せず、傾斜して約三〇度のスロープをなしている。つまり玄室と同一平面上に羨道部の床面が存在したかどうか疑わしいのである。

排水施設は、外部排水溝と内部排水溝よりなる。

内部排水溝は、石室の四周下と中軸線下とに幅約二〇cm・深さ約一〇cmの溝を穿ち、溝の側面に扁平な緑泥片岩を当て、その中に礫を満したものである。外部排水溝に接する東北辺のみはV字状に両側に板石を当てているのに対し、他の三辺では溝の外側にのみ板石がある。石室中軸線に沿った排水溝は、その端、つまり東北辺および外部排水溝と接する部分には板石を当てているが、他は縁石がなく礫をつめたのみである。そして更に約一五cmの厚さに礫を石室基底面いっぱいに敷きつめて床面を形成、排水溝中の礫と連続しているのである。石室内に浸透した雨水は床面の礫層を通じて中央の排水溝に集められ、外部より浸透した水分は壁体を伝わってその下の排水溝に集められて、共に東北辺中央の接点に集合、長大な外部排水溝を経て墳丘の東北方の谷に放出される。

外部排水溝は、全長約一三・五m、高低差約二mを有する。黒褐色硬質土の端あたりまでは石室主軸線にほぼ一致しており、この部分の外部排水溝は石室と同時に同一設計のもとに作業が行われたのであろう。それより先の部分はかなりの彎曲を示しているから、附加的に連続せしめた部分であろう。端の約二mの部分は蓋石を欠き、末端に至っては礫のみとなっている。前述の如く外部排水溝の長さは墳丘の半径を越えていると考えられるので、少くともその三分の一は墳丘の端より更に外方に延長していたと思われる。また、その長さは谷に至るまで排水を導くという意図より築造された結果と見るべきであろう。その断面は第一号墳と同様に、二枚の側石を立て、その間に礫を満し、その上に蓋石を架している。いずれも、長約五〇cm・幅約二〇cm・厚五〜一〇cmの緑泥片岩が用いられている。

遺物についてみると、完全に破壊・盗掘されていたため、ほとんど残存していなかった。銅環の小破片一個・ガラス小玉六個(黄・紺)・銀製空玉二個・小鉄片一個が室内より、粗質の土師高杯の脚部が外部排水溝上の土中より、須恵器細片が若干盗掘坑より出土したに過ぎない。

最後に、この第五号墳の注目すべき点を若干指摘しよう。

まず、その著しい特色は、その整然たる排水施設であろう。普

通横穴式石室の調査において、壁体の石材をすべて除去するという作業はすこぶる困難であるが、今回の調査が盗掘者に助けられて、壁体の下の排水溝まで観察しえたのは皮肉な結果というべきであろう。かかる小さな石室に一〇mをこえる長大な整然たる排水溝が附属しているのは、石材にめぐまれたこの地方の特色とすべきであろうか。また、もし排水溝を西南あるいは東南の方角に築造しておれば、約半分の長さで谷に到達できたにもかかわらず、それに倍する労力を払って東北方にその排け口を求めているのは、石室がひとつの方角を意識して設計された事を示すものであろう。

次に問題となるのは羨道部の有無であるが、もし存在したとすれば比較的小規模のものであったであろうし、もし存在しなかったとしても、石室の東北辺とその前方の黒褐色硬質土のスロープがその役割を果した事が予想できるので、その横穴式石室としての性格が否定されるものではあるまい。

年代についてみると、石室平面が正方形に近い事、羨道部の比較的小規模であった事が予想できる事、壁体が扁平な石材の小口積によって構成されている事などは、初期横穴式石室の特徴ではあるが、銀製空玉の出土、極めて発達した排水施設、岩橋千塚や鳴滝第一号墳・第二号墳の示すところを考慮すれば、この第五号墳が五世紀代にさかのぼるものではなく、古くとも六世紀初に属するものと考える方が穏当な見解というべきであろう。

（樋口隆康＝京都大学助教授
吉本堯俊＝京都大学大学院学生）